

*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa 校訂テキスト及び試訳 (4)

佐藤 晃

1. はじめに

本稿は、9 世紀頃に活躍したと想定されるジュニャーナキールティ (*Jñānakīrti, Ye shes grags pa) の *Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa (PYBhKrU, 『波羅蜜乘修習次第説示』) の校訂テキスト及び試訳を提示するものである。筆者は、既にその一部を発表 (『*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa 校訂テキスト及び試訳 (1)』本誌第 24 号, 『同 (2)』本誌第 25 号, 『同 (3)』本誌第 26 号 (佐藤[2017])) しているが、本稿ではその続きの箇所を取り上げる。なお、佐藤 [2015]において PYBhKrU に関する概説, 【凡例】を示しておいたので本稿では割愛する。PYBhKrU 全体を概観できるように、現段階でのシノプシスをこれまでと同様に示しておく。箇所情報については、便宜上 D¹ (デルゲ版 no. 3922) の箇所情報のみを提示する。本稿で扱う箇所には、二重下線を付してある。

【*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa シノプシス】

(※シノプシス中、二重下線を付した箇所が本稿で扱う箇所となる)

- § 1. 序 D¹ 72b4
- § 2. 菩提心 D¹ 73a5
 - § 2.1. 菩提心の分類 D¹ 73a5
 - § 2.1.1. 誓願心と発趣心 D¹ 73a5
 - § 2.1.2. 三種類の誓願心と十九種類の発趣心 D¹ 73a7
 - § 2.1.2.1. 三種類の誓願心 D¹ 73b1
 - § 2.1.2.2. 十九種類の発趣心 D¹ 73b4

§ 2.2. 各菩提心と修行階梯	D ¹ 73b5
§ 2.3. 誓願心と発趣心の定義	D ¹ 73b7
§ 3. 実践	D ¹ 74a2
§ 3.1. 智慧——止観双運道——	D ¹ 74a2
§ 3.1.1. 止	D ¹ 74a3
§ 3.1.1.1. 止の資糧	D ¹ 74a3
§ 3.1.1.2. 止における認識対象	D ¹ 74a5
§ 3.1.1.3. 止の過程	D ¹ 74a6
§ 3.1.1.3.1. 貪欲を鎮める——不浄観——	D ¹ 74b1
§ 3.1.1.3.2. 瞋恚を鎮める——慈悲観——	D ¹ 74b5
§ 3.1.1.3.3. 愚癡を鎮める——縁起観——	D ¹ 74b5
<u>§ 3.1.1.3.4. 対象に対する不満足を鎮める</u>	<u>D¹ 74b6</u>
<u>§ 3.1.1.3.5. 昏沈と掉挙を鎮める</u>	<u>D¹ 74b6</u>
<u>§ 3.1.1.3.6. 六過失と八断行</u>	<u>D¹ 75a2</u>
<u>§ 3.1.1.3.7. 九種心住</u>	<u>D¹ 75b1</u>
<u>§ 3.1.1.4. 止の完成</u>	<u>D¹ 75b6</u>
§ 3.1.2. 観	D ¹ 75b7
§ 3.1.3. 止観双運道の果報	D ¹ 76a4
§ 3.1.3.1. 断惑	D ¹ 76a4
§ 3.1.3.2. 智慧の完成——智慧波羅蜜——	D ¹ 76a7
§ 3.2. 方便と智慧の併修	D ¹ 76b3
§ 3.2.1. 方便の定義	D ¹ 76b5
§ 3.2.2. 智慧の定義	D ¹ 76b5
§ 3.2.3. 方便と智慧の併修	D ¹ 77a1
§ 3.2.4. 方便と智慧の併修による果報	D ¹ 77a5
§ 4. 奥書	D ¹ 77b2

上記シノプシスで示した通り、修行者の実践は、止観から構成される智慧 (§ 3.1.) と方便 (§ 3.2.) からなる。本稿では、前号に引き続き、智慧を構成する止 (*sāmatha) 観 (*vipaśyanā) のうち、止 (精神集中) を解説する箇所の続きを扱う。以下、本稿で扱う箇所で論じ

られる内容を概説する。

前号で扱った§ 3.1.1.3.1.から§ 3.1.1.3.3.は、それぞれ貪欲、瞋恚、愚癡という三毒の対治として、不浄観（九想観）、慈悲観、縁起観が説示された。本稿で扱う§ 3.1.1.3.4.から§ 3.1.1.3.7.は、止の完成に至る過程で排除されるべき心の諸状態に対する対治が説示される。まず§ 3.1.1.3.4.では、三昧中の対象に対する不満足の対治として、三昧の功德に対する考察と対象に対する不満足という過失の考察という2つの方法が示される。続く§ 3.1.1.3.5.では、憂鬱と眠気を原因とする昏沈（心の沈鬱）と過去の好ましい事柄の想起を原因とする掉挙（心の高揚）それぞれの対治が示される。

昏沈の対治としては、光明想（光の相を対象とする瞑想）と喜悅されるべきもの、仏等の特質の作為が挙げられる。ここでは明示されないが、光明想は、より直接的には、昏沈の原因として挙げられる眠気の対治、それ以外は憂鬱の対治であると理解し得る。

§ 3.1.1.3.6.では、六過失（①怠惰、②対象の喪失、③昏沈、④掉挙、⑤無功用、⑥功用）とその対治としての八断行（A 信、B 意欲、C 努力、D 軽安、E 憶念、F 正知、G 思、H 捨）が示される。①怠惰の対治は、A 信から D 軽安までの一連のものとなる。信は三昧の諸功德に対する信頼とされ、それを得た行者はその功德の獲得を求めるようになり、そ

【表1】

心の状態		対 治
三毒	貪欲	不浄観（九想観）
	瞋恚	慈悲観
	愚癡	縁起観
対象に対する不満足		三昧の功德の考察 不満足の過失の考察
沈鬱（昏沈）	眠気による沈鬱	光明想
	憂鬱による沈鬱	喜悅される仏等の特質の作意
高揚（掉挙）		無常性の作意
散乱		意志的努力の捨
<六過失>		<八断行>
①怠惰		④信（三昧の功德への信頼）
		⑤意欲（三昧の功德への願求）
		⑥努力（三昧に対する努力）
		⑩軽安（心身の堪溶性）
②対象喪失		⑧憶念
③沈鬱（昏沈）		⑥正知
④高揚（掉挙）		
⑤意志的努力の非存在（無功用）		⑥思
⑥意志的努力（功用）		④捨
<九種心住>		
(1)住（心を対象へ留めること）		
(2)等住（心を対象へ連続的に働かせること）		
(3)安住（心の散乱の理解と回避）		
(4)近住（心の散乱の回避、心を対象に繰り返し置くこと）		
(5)抑制（三昧に関する歡喜を生起させること）		
(6)寂靜（三昧に関する不歡喜を止息させること）		
(7)息滅（沈鬱と眠気を取り除くこと）		
(8)一点集中（意志的発動無しに対象に働くよう努力すること）		
(9)定（心の平静な状態）		

の実現のために努力を行う。それにより心身の堪能性（軽安）が得られ、そのことによって、怠惰を離れることができると説明される。⑤以下はそれぞれ、②以下の対治となる。なお、⑤無功用については、PYBhKrU の著者ジュニャーナキールティが参照したであろう BhKr I や BhKr III の対応箇所の記事とのずれが確認され、注意が必要である（注 11 を参照）。

§ 3.1.1.3.7.では九種心住が示される。これは心を対象に留めることから止の完成に至るまでの過程を 9 段階で示している。前号から本稿に掛けて扱った箇所で示される止を得るまでの過程で実践される項目を整理したものが【表 1】である。§ 3.1.1.3.6.の六過失と八断行及び § 3.1.1.3.7.の九種心住は、それぞれまとまった議論である。一方で § 3.1.1.3.1.から § 3.1.1.3.5.までは、体系づけられたものというよりは、止を完成させるまでに生じ得る個々の心的状態の対治が別々に示されていると考えられる。一郷他[2011]で指摘されるように、§ 3.1.1.3.1.から § 3.1.1.3.5.で扱われる心的状態が、§ 3.1.1.3.6.の六過失として整理されていると見ることもできるかもしれないが、それらの対治の内容は必ずしも一致していないことには注意が必要であろう。

前号で扱った § 3.1.1.3.1.から § 3.1.1.3.3.については、対応する BhKr I の記述は無かった（BhKr I は「貪欲等」「不浄観等」と省略した記述になっている）が、本稿で扱った PYBhKrU の記述は全体的にカマラシーラの BhKr I 等の記述と一致するものと言え、その内容自体に独自の見解が示されているとは言えない。注意すべき点を挙げるとするならば、§ 3.1.1.3.7.で示される九種心住説が誰の説に基づくかという点である。内容自体は BhKr I と相違無いが、その説について、BhKr I は「先師たち、そして、マイトレヤ」（注 26 を参照）とするのに対して、PYBhKrU は「尊者アサンガ」と示している。BhKr I の「先師たち」の中にアサンガが含まれている可能性は十分にあるが、PYBhKrU がアサンガのみを挙げる点には幾ばくかの注意が必要だと思われるが、現段階ではそれに答えるだけの準備が無く、指摘するに留めておく。

2. *Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa 校訂テキスト 及び試訳

【 校訂テキスト及び試訳 】

§ 3.1.1.3.4. 対象に対する不満足を沈める

(C 76a6f.; D¹ 74b6; D² 167b7-168a1; G¹ 114a4; G² 239b6-240a1; N¹ 81a5; N² 189a1f.; P¹ 81a4f.; P² 197b8-198a1)

(*¹gang gi tshe^{*1}) sems der^{*2} mngon par mi dga' bar^{*3} mthong ba de'i tshe ting nge 'dzin gyi yon tan la bsam pa dang^{*4} mi dga'^{*5} ba'i skyon la^{*6} (*⁷bsam pas^{*7}) de yang^{*8} zhi bar bya'o //

<note> (*¹...^{*1})gang gi tshe conj. : [gang gi tshe TAĀ; yadā (= gang gi tshe Tib.) BhKr I; gang gi tshe APrDhT] gang gi PYBhKrU. ^{*2}der conj. : [der TAĀ; tatra (de la Tib.) BhKr I; de la APrDhT] de PYBhKrU. ^{*3}ba G¹,N¹,P¹. ^{*4}dang / D²,G², N¹,N²,P². ^{*5}dge C,D¹,G¹,G²,N¹,N²,P¹,P². ^{*6}la om. G²,N²,P². (*⁷...^{*7})bsam pa C, D¹,G¹,N¹,P¹; bsams pas G²,N²,P². ^{*8}ang D².

心が (*cittam) それ (止の対象) に対して不満足である (*tatrānabhiratam) と見られる場合, その場合には, 三昧の功德に対する (*samādhēḥ guṇe) 考察と, [止の対象に対する] 不満足 of 過失に対する (*anabhirater doṣe) 考察によって, それ (止の対象に対して不満足な心) も鎮められるべきである (*tad api praśamayet) . ¹

§ 3.1.1.3.5. 慚沈と掉挙を鎮める

(C 76a7-76b1; D¹ 74b6f.; D² 168a1f.; G¹ 114a4f.; G² 240a1f.; N¹ 81a5f.; N² 189a2f.; P¹ 81a5f.; P² 198a1f.)

yang gang gi tshe^{*1} gnyid^{*2} dang rmugs^{*3} pa las^{*4} sems zhum par mthong ba de'i tshe^{*5} snang ba'i 'du shes bsgom^{*6} pa dang^{*7} rab tu dga' ba (*⁸yid la byed pa^{*8}) sangs rgyas la sogs pa'i yon tan yid la byed pas zhum pa de yang^{*9} zhi bar bya'o //

<note> ^{*1}tshe om. C,D¹,G¹,N¹,P¹. ^{*2}nyid P¹. ^{*3}mun C,D¹,G¹,G²,N¹,N²,P¹,P². ^{*4}la G¹,N¹,P¹. ^{*5}tshe / G¹,N¹,N²,P¹,P²; tshe // N². ^{*6}sgom G¹,N¹,P¹. ^{*7}dang / D²,G¹,

N¹,P¹. (*⁸…⁸)yid la byed pas C,D¹,G¹,N¹,P¹; yid 'byed pa N². *⁹ang D².

また、憂鬱と眠気によって (*styānamiddhāt) 心が (*cittam) 沈鬱になっている (昏沈, *līnam) と見られる (*paśyet) 場合 (*yadā), その場合には (*tadā) 光明想を修習し (*ālokaśamjñābhāvanayā)², また、喜悅されるものを作意 (*pramodyamanasikāreṇa) すなわち仏等の特質を作意することにより (*buddhādiguṇamanasikārāt), その [心の] 沈鬱 (*tal layam) を鎮めるべきである (*praśamayet).³

(C 76b1; D¹ 74b7-75a1; D² 168a2; G¹ 114a5f.; G² 240a2f.; N¹ 81a6f.; N² 189a3; P¹ 81a6f.; P² 198a2f.)

yang gang gi tshe sngon dgod^{*1} pa dang rtse zhing dga' ba^{*2} rjes su dran pas^{*3} sems bar^{*4} skabs su rgod par mthong ba de'i tshe^{*5} mi rtag pa yid la byed pas de yang^{*6} zhi bar bya'o //

<note> *¹rgod D²,G¹,G²,N¹,N²,P¹,P². *²bar G¹,N¹,P¹. *³bas N². *⁴par G¹,N¹,N²,P¹. *⁵tshe / C,D¹,G¹,N¹,P¹. *⁶ang D².

また、以前に笑ったことや楽しく喜んだことを想起することによって (*pūrvahasitaramitānusmarataḥ), [止の] 間において、高揚した心が (*cittam antarā uddhatam) 見られる場合 (*yadā . . . paśyet), その場合 (*tadā), [以前に笑ったこと等の] 無常性を作意することにより (*anityatāmanasikāreṇa), そ [の高揚した心] も (*tad api) 鎮められるべきである (*praśamayet).⁴

(C 76b1-76b2; D¹ 75a1f.; D² 168a2f.; G¹ 114a6-114b2; G² 240a3f.; N¹ 81b7-81b1; N² 189a3f.; P¹ 81a7f.; P² 198a3-5)

yang gang gi tshe zhum pa dang rgod pa dag dang bral ba nyid kyis^{*1} cha mnyam par 'jug cing sems rang gi mtshan nyid kyis^{*2} gnas par mthong ba de'i tshe^{*3} bsgrims^{*4} pa dang glod^{*5} pa btang snyoms su (*⁶bya ste^{*6}) / gal te sems mnyam par (*⁷jug tu zin kyang^{*7}) (*⁸bsgrims pa^{*8}) byas na /^{*9} de'i tshe sems mnam par g-yeng bar^{*10} gyur ro //

<note> *¹kyi G¹,N¹,P¹. *²kyi G¹,N¹,P¹. *³tshe / C,D¹,G¹,N¹,P¹. *⁴bsgrim G²,N²,P²; sgrim D². *⁵klod D¹. (*⁶…⁶)byas te C,D¹,G¹,N¹,P¹. (*⁷…⁷)jug tu C,D¹,G¹,N¹,P¹ (*⁸…⁸)bsgrim par D²; sgrim pa G¹,N¹,P¹. *⁹/ om. D²,G²,N². *¹⁰par D².

さて、沈鬱と高揚 [の両者] を (*layauddhatyābhyām) 離れたことにより (*viviktatayā), 平静な状態となり (*samapraṅgāṃ), [心] それ自身の特徴を持って定まったと見られる場合 (*yadā . . . paśyēt), その場合には (*tadā), 意志的努力を緩めて (*ābhogaśīthilīkareṇa) 捨てるべきである (*upekṣete). もし心が平静な状態において意志的努力が為されるならば (*yadi citte samapraṅgāṃ ābhogaḥ kriyate), その場合, 心は散乱するであろう (*tadā cittam vikṣipet). ⁵

§ 3.1.1.3.6. 六過失と八断行

(C 76b2-4; D¹ 75a2f.; D² 168a3f.; G¹ 114a2f.; G² 240a4-6; N¹ 81b1-3; N² 189a5f.; P¹ 81a8-81b2, P² 198a5-7)

le lo dang ni dmigs pa brjed pa dang // de bzhin zhum rгод mi rtsol ba dang
rtsol //

ting nge 'dzin la thams cad nyes par 'gyur // dad sogs^{*1} sems nyid de yi
gnyen po yin // PYBhKrU v.11 //

mdor na ting nge 'dzin^{*2} thams cad kyi^{*3} nyes pa nyid ni rnam pa drug yod
de ^{*4} 'di lta ste / le lo dang ^{*5} dmigs pa brjed pa dang ^{*6} zhum pa dang ^{*7}
rгод pa dang ^{*8} (*9)bsgrims pa dang ^{*10} ma bsgrims pa'o ^{*9})

<note> ^{*1}srogs G¹. ^{*2}'dzin ni G²,N²,P². ^{*3}kyi // G²,N²,P². ^{*4}// N². ^{*5}/ om. D². ^{*6}/ om.
D²,N¹,P¹. ^{*7}/ om. D²,N¹,P¹. ^{*8}/ om. D². (^{*9}...^{*9})ma bsgrims pa dang / bsgrims pa'o //
G²,N²,P². ^{*10}/ om. D².

①怠惰 (*kausīdhyā) と②対象の喪失 (*ālabanasampramoṣa) と、
同様に, ③沈鬱 (昏沈, *laya), ④高揚 (掉挙, *auddhatya), ⑤意
志的努力 (功用, *ābhoga) と⑥意志的努力の無いこと (無功用,
*anābhoga) は, 三昧において, すべて過失となる. 信 (*śraddhā)
等の [8種の] 心こそ, そ [の過失] にとっての対治である.

要約すると (*saṃkṣepaṇa), まさにあらゆる三昧には (*sarvasyaiva
samādheḥ) 6種の過失がある (*ṣaḍ doṣā bhavanti). すなわち
(*tadyathā), ①怠惰 (*kausīdya-) と②対象の喪失 (*ālabanasam-
pramoṣa-) と③沈鬱 (*laya-) と④高揚 (*auddhatya-) と⑤意志的努
力 (*ābhoga-), そして, ⑥意志的努力の無いこと (*anābhoga-) で

ある。 ⁶

(C 76b4–77a2; D¹ 75a3–75b1; D² 168a5–168b3; G¹ 114b4–115a5; G² 240a6–241a1; N¹ 81b3–82a2; N² 189a6–189b5; P¹ 81b2–8; P² 198a7–198b6)

de mams^{*1} kyi gnyen por^{*2} spong ba'i 'du byed brgyad bsgom par bya'o zhes bcom ldan 'das kyis^{*3} gsungs te / 'di lta ste / dad pa dang /^{*4} 'dun^{*5} pa dang /^{*6} rtsol ba dang /^{*7} shin tu sbyangs pa dang /^{*8} dran pa dang /^{*9} shes bzhin dang /^{*10} btang snyoms dang /^{*11} sems pa'o // de la dang po bzhi ni le lo'i gnyen po yin te / de yang^{*12} ting nge^{*13} 'dzin gyi yon tan mams la yid ches pa'i mtshan nyid (^{*14}can gyi^{*14}) (^{*15}dad pas^{*15}) rnal 'byor pa mams de la mngon par^{*16} 'dod pa'i sems skye bar 'gyur la / mngon par 'dod pa de las^{*17} rtsol ba rtsom par 'gyur ro // de las kyang lus dang sems las su^{*18} rung ba nyid thob par 'gyur ro // shin tu sbyangs pa de las (^{*19}lus dang sems le lo las ldog^{*20} par 'gyur ro^{*19}) // de bas na dad pa la sogs pa ni le lo (^{*21}spang ba'i^{*21}) phyir bsgom par bya'o // dran pa ni dmigs pa brjed pa'i gnyen po'o // shes bzhin ni zhum pa dang rgod pa'i gnyen po yin te / des zhum pa dang rgod pa dag nye bar (^{*22}shes pa yin pa'i phyir ro^{*22}) // zhum pa dang rgod pa ma zhi ba'i dus su ni mi rtsol ba nyes pa yin te /^{*23} de'i gnyen por ni sems pa^{*24} bsgom par bya'o // zhum pa dang rgod pa de dag nye bar zhi bar gyur nas /^{*25} gang gi tshe^{*26} sems rang gi rgyun gyis^{*27} 'jug pa^{*28} de'i tshe ni^{*29} rtsol ba nyes pa yin pas^{*30} de'i gnyen por btang snyoms bsgom par bya'o // spong^{*31} ba'i 'du byed brgyad po (^{*32}de dang^{*32}) yang dag par ldan pa'i ting nge 'dzin ni gang gis^{*33} rdzu 'phrul la sogs pa'i^{*34} yon tan rdzogs par byed par mchog tu las su rung bar 'gyur ro // de bas na mdo las

spong^{*35} ba'i 'du byed brgyad dang ldan pa'i rdzu 'phrul gyi rkang pa bsgom^{*36} par byed do^{*37}

zhes gsungs pa yin no //

<note> ^{*1}nam N². ^{*2}po G²,N²,P². ^{*3}kyi P¹. ^{*4}/ om. D². ^{*5}mdun P². ^{*6}/ om. D². ^{*7}/ om. D². ^{*8}/ om. D². ^{*9}/ om. D². ^{*10}/ om. D². ^{*11}/ om. D². ^{*12}ang D². ^{*13}nge om. N¹. (^{*14}...^{*14})kyi C,D¹,N¹,P¹. (^{*15}...^{*15})rnam pa dad pas D². ^{*16}bar G¹. ^{*17}las C,D¹. ^{*18}su om. G². (^{*19}...^{*19})lus dang sems le lo las zlog par 'gyur ro G¹,P¹; lus dang sems las su rung bas ldog par 'gyur ro G²,N²,P². ^{*20}zlog N¹. (^{*21}...^{*21})spangs pa'i G¹,N¹,P¹. (^{*22}...^{*22})zhi ba yin pa'i phyir ro N². ^{*23}/ om. C. ^{*24}pa om. C,D¹,D². ^{*25}/ om. G²,N²,P².

*²⁶tshe om. N¹,P¹. *²⁷gyi G¹,N¹,P¹. *²⁸pa'i G²,N²,P². *²⁹ni / G¹,N¹,P¹. *³⁰pas / G¹,P¹; pa N². *³¹spang N¹. (*³²... *³²)de D¹; dang / G¹,N¹,P¹; de dag dang D². *³³gi C,D¹,G¹, N¹,P¹. *³⁴pa G¹,N¹,P¹. *³⁵spang C,D¹; spro G¹,P¹. *³⁶sgom D¹,D²,G¹,N¹,P¹. *³⁷do // N¹; de D².

それら [6 種の過失] にとっての対治として (*teṣāṃ pratipakṣeṇa) 8 種の断行が修習されるべきである (*aṣṭau prahāṇasaṃskārā bhāvanīyāḥ), と世尊によって説かれた. すなわち [, 八断行とは], ㊶ 信 (*śraddhā-), ㊷ 意欲 (*chanda-), ㊸ 努力 (*vyāyāma-), ㊹ 軽安 (*praśrabdhi-), ㊺ 憶念 (*smṛti-), ㊻ 正知 (*saṃprajanya-), ㊼ 捨 (*upekṣā-), ㊽ 思 (*cetanā-) である ⁷. それら [八断行] のうち, 最初の 4 つ (信, 意欲, 努力, 軽安) は (*tatrādayās catvāraḥ), 怠惰の対治である (*kausīdyasya pratipakṣāḥ). そして, そのことは [以下の通りである. すなわち], 三昧の諸々の功德に対する信頼を特徴とする信によって (*samādher guṇeṣu saṃpratyaya-lakṣaṇayā śraddhayā), ヨーガ行者達にそれ (三昧の諸功德) に対する願求という心が生起するであろう (*tatra yoginām abhilāśakacittam utpadyate). その願求から (*tato 'bhilāśāt), [三昧に対する] 努力が始まるであろう (*vyāyāma ārabhet). また, それ (努力) から身体と心との堪能性 (*karmanyatā) が得られるであろう. その [堪能性, すなわち] 軽安 (*praśrabdhi) により身体と心が怠惰から退くであろう. したがって, ㊶ 信に始まる [, ㊷ 意欲, ㊸ 努力, ㊹ 軽安の 4 つ] は怠惰を断ずるために修習されるのである ⁸. ㊺ 憶念 (*smṛti) は, [三昧における] 対象の喪失 (*ālambanasampramoṣa) の対治である ⁹. ㊻ 正知 (*saṃprajanya) は, 沈鬱 (*laya) と高揚 (*auddhatya) の対治である. というのは, それ (正知) によって, 沈鬱と高揚の両者は観察されるからである ¹⁰. 沈鬱と高揚が完全に鎮まっていないときには, 意志的努力の無いこと (無功用, *anābhoga) が過失である. それ (無功用) の対治として, ㊼ 思 (*cetanā) が修習されるべきである ¹¹. それら沈鬱と高揚とが [思の修習により] 鎮まることで, 心は任運に活動するが, そのときには意志的努力 (功用, *ābhoga) が過失である. よって, それ (功用) の対治として ㊽ 捨 (*upekṣā) が修習されるべきである ¹². それら八

断行を正しく伴った三昧は、それによって神通等の功徳を成就させる
ところの、最高の堪能性 (*paramakarmanya) である¹³。したがって、
經典に、

八断行を伴った [四] 神足 (*ṛddhipāda) を修習すべきである。
と説かれている¹⁴。

§ 3.1.1.3.7. 九種心住

(C 77a2–77a7; D¹ 75b1–6; D² 168b3–7; G¹ 115a5–115b6; G² 241a1–241b1; N¹ 82a2–7;
N² 189b6–190a4; P¹ 81b8–82a6; P² 198b6–199a4)

bsgom^{*1} pa'i rim pa 'di nyid la dgongs nas bcom ldan 'das yum de nyid las /^{*2}

de la sems mnyam par gzhag^{*3} par byed /^{*4} yang dag par 'jog par byed / rnam
par 'jog par byed /^{*5} nye bar 'jog par byed /^{*6} dul bar byed / zhi bar byed /
nye bar zhi bar byed / gcig^{*7} pa nyid du byed / ting nge 'dzin du byed do^{*8}

zhes gsungs^{*9} pa yin no // (*¹⁰de la^{*10}) yang dag par 'jog par byed pa ni dmigs
pa de nyid la rgyun gyis 'jug par byed pa'o // rnam par 'jog pa^{*11} ni rnam par
g-yeng bar^{*12} shes par (*¹³bya ste /^{*13}) de nye bar zhi bar byed pa'o // nye bar
'jog par byed pa ni rnam par g-yeng ba^{*14} nye bar zhi bar byas nas^{*15} de nyid
la gong nas gong du gtod par byed pa'o // dul bar byed pa ni dga' ba skyed^{*16}
par byed pa'o // zhi bar byed pa ni mi dga' ba (*¹⁷nye bar zhi bar^{*17}) byed pa'o
// nye bar zhi bar byed pa ni gnyid^{*18} dang rmugs pa la sogs pa byung ba sel
bar byed pa'o // gcig^{*19} pa nyid du byed pa ni dmigs pa la mngon par 'du
(*²⁰byed pa^{*20}) med par 'jug pa la 'bad par byed pa'o // ting nge 'dzin du
(*²¹mnyam par 'jog pa^{*21}) ni sems mnyam pa nyid thob pa la btang snyoms su
byed pas yang dag par^{*22} 'dzin par byed do^{*23} zhes bya ba'i don to // tshig
dgu po 'di dag gi^{*24} bshad pa ni slob dpon thogs med kysis^{*25} mdzad pa las
bris pa yin no //

<note> ^{*1}sgom D². ^{*2}/ om. C,D¹,G¹,N¹,P¹. ^{*3}bzhag G²,N²,P². ^{*4}bya / C,D¹,D²; bya'o //
G¹,N¹,P¹. ^{*5}/ om. G¹,N¹,P¹. ^{*6}/ om. G¹,N¹,P¹. ^{*7}cig N¹,P¹. ^{*8}do // D². ^{*9}gsung G².
(*¹⁰...^{*10})de la om. C,D¹,G¹,N¹,P¹. ^{*11}par byed pa D². ^{*12}ba D²,N²,P². (*¹³...^{*13})byas te
D². ^{*14}pa G¹; bar G². ^{*15}nas / G¹. ^{*16}bsked G²,N²,P². (*¹⁷...^{*17})zhi bar C,D¹,G¹,N¹,P¹.
^{*18}gnyis P¹. ^{*19}cig G¹,N¹,P¹. (*²⁰...^{*20})bya ba D²,G²,N²,P². (*²¹...^{*21})byed pa D²,G²,P².

^{*22}pas G²,N²,P². ^{*23}de G²,N²,P². ^{*24}gis G²,N²,P². ^{*25}kyi G¹,N¹,P¹.

この [止の] 修習の次第こそを意趣して、まさに『仏母 [般若経]』に、

- (1) それ (対象) に対して心を留めるべきである (*sthāpayati) .
- (2) [心を] しっかり留めるべきである (*samsthāpayati) . (3) [心を] 安定させるべきである (*avasthāpayati) . (4) [心を] 近づけるべきである (*upasthāpayati) . (5) [心を] 制御すべきである (*damayati) . (6) [心を] 鎮めるべきである (*śamayati) .
- (7) [心を] 止息させるべきである (*vyupaśamayati) . (8) [心を] 一点に集中すべきである (*ekotīkaroti) . (9) [心を] 定めるべきである (*samādhāti) .

と説かれている¹⁵。それらのうち、(2) [対象に心を] しっかりと留めるべきである (*samsthāpayati) とは、[まず (1) 心を対象 (*ālabana) に留める¹⁶が、] その同じ対象に対して連続的に働かせることである¹⁷。(3) [対象に心を] 安定させるべきである (*avasthāpayati) とは、[心の] 散乱 (*vikṣepa) を理解して、それ (心の散乱) を避けることである¹⁸。(4) [心を対象に] 近づけさせるべきである (*upasthāpayati) とは、[心の] 散乱を避けて、その同じ [対象に心を] 何度も置くことである¹⁹。(5) [心を] 制御すべきである (*damayati) とは、歓喜 (*rati) を生起させることである²⁰。

(6) [心を] 鎮めるべきである (*śamayati) とは、不歓喜 (*arati) を止息させることである²¹。(7) [心を] 止息させるべきである (*vyupaśamayati) とは、生起した鬱ぎ込み (*styāna) と眠気 (*middha) 等を取り除くことである²²。(8) [心を] 一点に集中すべきである (*ekotīkaroti) とは、[心が] 対象に対して意志的発動 (*abhisamkāra²³) 無しに起こるように努力を為すことである²⁴。(9) [心を] 定めるべきである (*samādhāti) とは、心が平静なる [状態を] 得たならば、[その心は対象に] 無関心であることにより、真実に把持するという意味である²⁵。これら [九種心住に関する] 9 つの語句の説示は、尊者アサンガによって著された [論書] に説かれている²⁶。

§ 3.1.1.4 止の完成

(C 77a7-77b1; D¹ 75b6f.; D² 168b6-169a1; G¹ 115b5-116a1; G² 241a6-241b2; N¹ 82a7-82b2; N² 190a3-5; P¹ 82a6-8; P² 199a4f.)

yang rim pa 'dis^{*1} ting nge 'dzin^{*2} rdzogs par gang gi tshe 'gyur zhe na / de'i phyir^{*3} smras pa /

gang gi sems ni rtsol ba med pas^{*4} ni // rang gi ngang gis^{*5} 'jug par 'gyur ba na //

de'i^{*6} tshe sangs rgyas mnyam 'jog la brten te // 'di ni (^{*7}ting nge 'dzin^{*7}) gyi tshul yin no // PYBhKrU v.12 //

gang gi tshe dmigs pa de la mngon par 'du byed pa med par^{*8} 'jug pas sems gnas par (^{*9}gyur pa^{*9}) de'i tshe^{*10} zhi gnas rdzogs pa yin par shes par bya'o //

<note> ^{*1}ni G¹,N¹,P¹. ^{*2}'dzin ni G²,N²,P². ^{*3}tshe C,D¹,G¹,N¹,P¹. ^{*4}par D²,G²,N²,P².

^{*5}gi G¹,P¹; gis / N¹. ^{*6}de G²,N²,P². (^{*7}...^{*7})ting 'dzin kun D². ^{*8}par / G¹,N¹,P¹. (^{*9}...

^{*9})gyur ba G¹,N¹,P¹. ^{*10}tshe / G,N¹,P¹.

そして、この [上述の三昧に関する] 次第に基づいて、三昧が或るときに成就すると言われるが、それゆえ [以下のように] 述べる。

或る者の心が無功用に任運に働くとき、そのとき、仏は静慮に依る。これが三昧に関する道理である。

その対象 (*ālabana) に対して、心が作意 (*manasikāra) 無く起こることによって定まるとき、そのとき、止 (*śamatha) は完成したと知られるべきである²⁷。

(未完)

本稿は、早稲田大学 2018 年度特定課題 (B) ・2018B-028 の成果の一部である。

—— 略号及び参考文献一覧 ——

【一次文献】

AAĀ: Abhisamayālaṃkāṛāloka (Haribhadra). *Abhisamayālaṃkāṛāloka Prajñāpāramitāvyaḥkyā* (Commentary on *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā*) by Haribhadra: Together with the Text Commented on. Ed. Unrai Wogihara. Tokyo: The Toyobunko, 1932–1935. = D no. 3791, P no. 5189. **AKBh**: Abhidharmakośabhāṣya (Vasubandhu). *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967. **AKV**: Abhidharmakośavyākhyā (Yaśomitra). *Sphutārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*. Ed. Unrai Wogihara. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1971. **APrDhṬ**: *Avikalpapraveśadhāraṇīṭikā (Kamalaśīla). D no. 4000, P no. 5501. **BhKr I**: Bhāvanākrama I (Kamalaśīla). *Minor Buddhist Texts, Part II, First Bhāvanākrama of Kamalaśīla, Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction and English Summary*. Ed. Giuseppe Tucci. Serie Orientale Roma IX, 2. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1958. = D no. 3915, P no. 5310. **BhKr II**: Bhāvanākrama II (Kamalaśīla). *The Tibetan Text of the Second Bhāvanākrama*. Ed. Kiyotaka Goshima. Kyoto, 1983. **BhKr III**: Bhāvanākrama III (Kamalaśīla). *Minor Buddhist Texts, Part III, Third Bhāvanākrama*. Ed. Giuseppe Tucci. Serie Orientale Roma XLIII. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1971. **MHK**: Madhyamakahr̥dayakārikā (Bhāviveka). *Madhyamakahr̥dayam of Bhavya*. Ed. Chr. Lindtner. Chennai: The Adyar Library and Research Centre. **MAVṬ**: Madhyāntavibhāgaṭikā (Sthiramati). *Sthiramati, Madhyāntavibhāgaṭikā, Exposition Systématique du Yogācāravijñaptivāda. Tome I-Texte*. Ed. Susumu Yamaguchi. Nagoya: Librairie Hajinkaku, 1934. **PVSPrP**: Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā. *Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā I-I*. Ed. Takayasu Kimura. Tokyo: Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd., 2007. = D no. 9, P no. 731; T vol. 8, no. 220 (『大般若波羅蜜多經』(玄奘訳)), T vol. 5, no. 223 (『摩訶般若波羅蜜經』(鳩摩羅什訳)). **PYBhKrU**: *Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa (*Jñānakīrti). 詳細は佐藤[2015]を参照. **ŚBh III (1)**: Śrāvakabhūmi. 声聞地研究

会「梵文声聞地（二十二）——第三瑜伽処（1）和訳・梵文——」
『大正大学総合佛教研究所年報』30, 2008. **TAĀ**: *Tattvāvatārākhyasakarasugatavācasamkṣiptavyākhyāprakaraṇa (*Jñānakīrti). D no. 3709, P no. 4532. 『**顕揚論**』: 無著造『顕揚聖教論』（玄奘訳）, T vol. 31, no. 1602. 『**習定論**』: 無著本, 世親釈『六門教授習定論』（義浄訳）, T vol. 31, no. 1607.

【二次文献】

Sutus [2006]: Aramrattana Sutus. 「パーリ仏教における光明遍 (āloka-kaṣiṇa) 業処について」『パーリ学仏教文化学』20. **阿部[2004]**: 阿部貴子「光の瞑想——『瑜伽師地論』における覚寤瑜伽と āloka-sam-jñā について」『密教学研究』36. **磯田[1979]**: 磯田熙文「波羅蜜理趣の実践論」『論集』（東北印度学宗教学会）6. **一郷他[2011]**: 一郷正道他『瑜伽行中観派の修道論の解明——『修習次第』の研究——』. 2008年度～2010年度科学研究費補助金基盤研究(C)成果報告書. **岩田[2013]**: 岩田孝「サハジャヴァジュラの波羅蜜理趣での修習論——『真実十偈釈』（Tattvadaśakaṭīkā）和訳研究（ad Tattvadaśaka 5d-6）——」『伊藤瑞叡博士古稀記念論文集 法華仏教と関係諸文化の研究』, 山喜房仏書林. **佐藤[2015]**: 佐藤晃「*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa 校訂テキスト及び試訳（1）」『論叢アジアの文化と思想』24. ——[2016]: ——「*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa 校訂テキスト及び試訳（2）」『論叢アジアの文化と思想』25. ——[2017]: ——「*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa 校訂テキスト及び試訳（3）」『論叢アジアの文化と思想』26. **ツルティム・小谷[1991]**: ツルティム・ケサン, 小谷信千代『ツォンカパ著仏教瑜伽行思想の研究』, 文英堂. **藤田[1988]**: 藤田祥道「九種心住について」『印度学仏教学研究』37(1). **山口[1966]**: 山口益『安慧阿遮梨耶造 中辺分別論釈疏』（復刊叢書8）, 鈴木学術財団.

- ¹ Cf. TAĀ D 61a7–61b1, P 68a3f.; BhKr I 206, 16: yadā tu cittam^{*1} tatrānabhīratam paśyet, tadā samādhher guṇadarśanato 'bhiratiṃ tatra bhāvayet (= D 31b2, P 33a4f.: gang gi tshe (^{*1}de la^{*1}) mi dga' bar mthong ba de'i tshe ting nge 'dzin gyi yon tan la lta bas de la dga' ba bsgom zhing (^{*1}...^{*1}) la D)) (^{*1}cittam om. Tib.) (一方で、心がそれ(止の対象)に対して不満足であると見られる場合、その場合、三昧の功德を見ることによって、それ(止の対象)に対する満足を修習すべきである); APrDhT D 136a2f., P 162b4; BhKr II 49, 5–8; BhKr III 9, 5f. BhKr の和訳について、随時一郷他[2011]を参照。
- ² 光明想を昏沈の対治とする説は広く確認される。Cf. 阿部[2004] 注 4)。阿部[2004]は ŚBh に説かれる覚寤瑜伽の次第に含まれる光明想を分析し、その特徴を指摘する。
- ³ Cf. TAĀ D 61b1f., P 68a4f.; BhKr I 206, 19–23: atha yadā styānami-ddhābhibhavād ālambanagrahaṇāprakaṭayā līnaṃ cittam bhavati, tadāloka-samjñābhāvanayā^{*1} prāmodyavastubuddhādiguṇamanasikārāl layam upaśāmya^{*2} punas tad evālambanaṃ dṛḍhataraṃ gṛhṇīyāt (= D 31b2f., P 33a5f.: ji ste gang gi tshe rmugs pa dang gnyid kyis non te / dmigs pa 'dzin pa la mi gsal zhing sems bying bar gyur pa de'i tshe snang ba'i 'du shes bsgoms pa'am / mchog tu dga' ba'i dngos po sangs rgyas la sogs pa'i yon tan yid la byed pas bying ba bsal la dmigs pa de nyid dam du bzung ngo //) (^{*1}bsgoms pa'am / Tib. for ⁰bhāvanayā. ^{*2}bsal la Tib. for upaśāmya) (また、憂鬱や眠気に侵されて、[止における]対象の把持が不明確であることにより、心は沈み込んでしまうが、その場合、光明想を修習することによって、あるいは、喜悅されるべき事物たる仏等の特質を作意することによって、[心の]沈鬱な状態を鎮め、再度、かの同じ対象をより堅固に把持すべきである); APrDhT D 136a3f., P 162b5f.; BhKr II 49, 8–12; BhKr III 9, 7–11. この箇所而言及される「仏等の特質の作意」は、AAA では、本稿§ 3.1.1.3.6.に対応する箇所而言及される。Cf. 本稿注 10 光明想が眠気、沈鬱を鎮めるための瞑想法だとする伝統は *Āṅguttaranikāya*, *Dīghanikāya*, *Vimuttimaggā*, *Visuddhimaggā* 等に遡ることができる。Cf. Sutus [2006].
- ⁴ Cf. TAĀ D 61b2, P 68a5; BhKr I 206, 23–25: atha yadā pūrvahasitarāmitādyanusmarato 'ntarā cittam uddhatam paśyet, tadānityatādisamvegamanasikārād^{*1} auddhatyaṃ praśamayet (= D 31b3, P 33a6f.: ji ste gang gi tshe de sngon dgod pa dang rtse ba la sogs pa dran zhing bar bar du sems rgod par mthong ba de'i tshe mi rtag pa la sogs pa yid 'byung bar 'gyur ba'i dngos po yid la byed pas rgod pa zhi bar bya'o //) (^{*1}yid 'byung bar 'gyur ba'i dngos po Tib. for ⁰samvega⁰) (また、以前に笑ったことや楽しんだこと等を想起することにより、[止の]間において、高揚している心を見るならば、その場合、[以前に笑ったこと等の]無常性等の厭離を作意することから、[心の]高揚を鎮めるべきであ

る); APrDhT D 136a4f., P 162b6f.; BhKr II 49, 13–18; BhKr III 9, 13–16; MHK III.17. この箇所而言及される「無常性の厭離の作意」は, AAĀ では, 本稿§ 3.1.1.3.6.に対応する箇所而言及される. Cf. 本稿注 10.

⁵ Cf. TAA D 61b2, P 68a5–7; BhKr I 207, 2–5: atha^{*1} yadā layauddhatyābhyāṃ viviktatayā samapravṛttam svarasavāhi cittam paśyet, tadābhogaśīthilīkaraṇād upekṣate. yadā tu samapravṛtte saty ābhogaḥ kriyate, tadā^{*2} cittam vikṣipet (= D 31b5, P 33a7f.: gang gi tshe bying ba dang rgod pa gnyis ka dang bral te mnyam par 'jug cing sems rang gi ngang gis 'byung bar mthong ba de'i tshe rtsol ba klod de btang snyoms su bya'o // gal te mnyam par 'jug pa la rtsol ba byas na sems rnam par g-yeng bar 'gyur ro //) (*¹atha om. Tib. *²na Tib. for tadā) (さて, 心が, 沈鬱と高揚の両者を離れたことにより, 任運に平静な状態となったのを見るならば, その場合には, 意志的努力を緩めることによって捨てるのである. 一方, [心が] 平静な状態であるときに意志的努力が為されるならば, その場合には, 心は散乱するであろう); APrDhT D 136a5f., P 162b8–163a1; BhKr II 49, 19–21; BhKr III 9, 19–21. PYBhKrU の「意志的努力を緩めて捨てるべきである」と訳した箇所は, “bsgrims pa dang glod pa btang snyoms su bya ste /” となっており, 直訳すると「意志的努力と緩めることを捨てるべきである」となるが, BhKr I 等に従い訳した. なお同じ著者の TAA も PYBhKrU と同じ蔵訳となっている.

⁶ Cf. TAA D 61b3–5, P 68a7–68b1; BhKr I 208, 3–5: saṃkṣeṣa sarvasyaiva samādheḥ ṣaḍ doṣā bhavanti. kausīdya ālambanasampramoṣa layaudhatyam anābhoga (*¹ābhoga iti^{*1}) (= D 32a4, P 33b8–34a1: mdor na ting nge 'dzin thams cad kyi nyes pa drug yod de / le lo dang /^{*1} dmigs pa brjed pa dang / bying ba dang /^{*2} rgod pa dang / mi rtsol ba dang /^{*3} rtsol ba'o // (*¹/ om. P. *²/ om. P. *³/ om. P)) ((*¹…^{*1})ābhoga iti conj. : [(mi rtsol ba dang /) rtsol ba'o // Tib.; Cf. AAĀ 928, 26: ābhoga iti] ābhogateti BhKr I) (要約すると, まさにあらゆる三昧には, 6 種の過失がある. ①怠惰と②対象の喪失と③沈鬱と④高揚と⑤意志的努力の無いことと⑥意志的努力である); AAĀ 928, 25f.; BhKr III 10, 8–10; MAVṬ 173, 15f. MAV 及び MAVṬ では, (1) 怠惰 (kausīdya), (2) 聖言の忘失 (avavādasya sammoṣa), (3) 沈鬱 (laya), (4) 高揚 (auddhatya), (5) 意志的努力の無いこと (asamskāra), (6) 意志的努力 (samskāra) の 6 種が挙げられるが, (3) と (4) を合わせて 1 つの過失とし, 計 5 種の過失とする. (2) は PYBhKrU, BhKr 等と異なる. 五過失と八斷行及び四神足に関する議論については, 山口[1966] 281 に指摘されている.

⁷ Cf. TAA D 61b5f., P 68b1f.; BhKr I 208, 6–8: teṣāṃ pratipakṣeṇāṣṭau prahāṇasamskāra bhāvanīyāḥ. tad yathā śraddhā chando vyāyamaḥ pra-

- śrabdhīḥ smṛtiḥ samprajanyaṃ cetanā upekṣā ceti (= D 32a4f., P 33b8–34a1: de rnams kyi gnyen poi^{*1} spong ba'i 'du byed brgyad bsgom mo / 'di lta ste / dad pa dang / 'dun pa dang / rtsol ba dang / shin tu sbyangs pa dang / dran pa dang / shes bzhin^{*2} dang / sems pa dang / btang snyoms so // (*¹po P. ^{*2}bzhan P)) (それら [6種の過失] にとっての対治として、8種の断行が修習されるべきである。[その8種の断行とは、] すなわち、信、意欲、努力、軽安、憶念、正知、思、捨である); AAĀ 928, 26–929, 1; BhKr III 10, 10–12; MAVṬ 174, 3–7.
- ⁸ Cf. TAĀ D 61b6–62a1, P 68b2–4; BhKr I 208, 8–14: tatrādayās catvārah kauśīdyasya pratipakṣāḥ. tathā hi samādher guṇeṣv abhisampratyaḥ lakṣaṇayā śraddhayā tatra yogino 'bhilāṣa utpadyate. tato 'bhilāṣād vīryam ārabhet, tadvīryabalena kāyacittakarmanyaṭām āśadayati. tataḥ praśrabdhakāyacetasaḥ kauśīdyam āvartate. ataḥ śraddhādayaḥ kauśīdyaprahāṇāyā bhāvanīyāḥ (= D 32a5–7, P 34a1–3: de la gong ma bzhi ni le lo'i gnyen po ste / 'di lta ting nge 'dzin gyi yon tan dag la mngon par yid ches pa'i mtshan nyid dang ldan pa'i dad pa rnal 'byor pa rnams de la 'dod pa skye'o // de nas 'dod pas brtson 'grus rtsom mo // de brtson 'grus kyi stobs kyis lus dang sems las su rung ba nyid byed do // de nas lus dang sems shin tu sbyangs par^{*1} gyur pas le lo ldog ste / de bas na dad pa la sogs pa ni le lo spang^{*2} ba'i phyir bsgom mo // (*¹sbyang bar P. ^{*2}spong P)) (それら [8種の断行] のうち、最初の4つは怠惰の対治である。すなわち、三昧の諸々の功德に対する信頼を特徴とする信によって、ヨーガ行者にそれ(三昧)に対する願求が生じる。それから、願求から[三昧への]努力を始め、その努力によって身体と心との堪能性に到達する。続いて、軽安なる身体と心から怠惰は退却する。したがって、信等[の4種]は、怠惰を断ずるために修習されるべきである); AAĀ 929, 2–7; BhKr III 10, 13–18; MAVṬ 174, 7–175, 1.
- ⁹ Cf. TAĀ D 62a1, P 68b4; BhKr I 208, 14f.: smṛtir ālambanasampramoṣasya pratipakṣāḥ (= D 32a7, P 34a3f.: dran pa ni dmigs pa brjed pa'i gnyen po'o //) (憶念は、[三昧における]対象の喪失にとっての対治である); AAĀ 929, 7f.; BhKr III 10, 187f.; MAVṬ 175, 2.
- ¹⁰ Cf. TAĀ D 62a1, P 68b4f.; BhKr I 208, 15f.: samprajanyaṃ layauddhatyayoḥ pratipakṣāḥ. tena layauddhatyayoḥ samyagupalakṣaṇāt (= D 32a7, P 34a4: shes bzhin ni bying ba dang rgod pa'i gnyen po ste / des bying ba dang rgod pa yang dag par rtogs pa'i phyir ro //) (正知は、沈鬱と高揚の両者にとっての対治である。なぜならば、それによって沈鬱と高揚の両者は正しく観察されるからである); AAĀ 929, 8–10; BhKr III 10, 19f.; MAVṬ 175, 2f. AAĀの当該箇所の説明内容は、本稿§ 3.1.1.3.5.での沈鬱を鎮める方法(仏等の特質の作意)と高揚を鎮める方法(無常性の厭離の作意)に関する記述内容も含む。
- ¹¹ Cf. TAĀ D 62a1f., P 68b5; BhKr I 208, 16–18: layauddhatyaprasāma-

nakāle tv anābhogadoṣaḥ. tatpratipakṣeṇa^{*1} ca cetanā bhāvanīyā (= D 32a7–32b1, P 34a4: bying ba dang rgod pa rab tu (*¹zhi ba'i dus na^{*1}) mi rtsol ba nyes pa ste / de'i gnyen por^{*2} sems pa bsgom mo / (*¹…^{*1})ma zhi ba'i dus na D. ^{*2}par D)) (*¹一郷他[2011] fn. 160 に従い訂正. tat pratipakṣeṇa BhKr I) (しかし、沈鬱と高揚を鎮めるときには、意志的努力の無いことという過失がある。そして、それ(意志的努力の無いこと)の対治として思が修習されるべきである); AAĀ 929, 10f.; BhKr III 10, 20–22; MAVṬ 173, 19f.; MAVṬ 175, 4. この箇所に関しては、BhKr III の次の箇所等も参照されるべきであろう。BhKr III 11, 2f.: līne 'pi citte sati, yady ābhoga na kriyate, tadā vipaśyanārahitatvād andapuruṣavac cittam līnaṃ syāt (また心が沈鬱であるときに、もし意志的努力が為されないならば、その場合は、[心は]観を欠いているので、盲目の人のように、心は沈鬱であろう); APrDhṬ D 136a6f.; BhKr II 49, 24–53, 2.

¹² Cf. TAĀ D 62a2, P 68b5f.; BhKr I 208, 18–20: layauddhatyaprasāme sati yadā cittam praśaṭhavāhi^{*1}, tadābhogadoṣaḥ. tatpratipakṣas^{*2} tadānīm upekṣā bhāvanīyā (= D 32b1, P 34a4f.: bying ba dang rgod pa rab tu zhi ste / gang gi tshe sems rnal du 'jug pa de'i tshe rtsol ba nyes pa yin te / de'i gnyen por de'i tshe btang snyoms bsgom^{*1} mo // (*¹sgom P)) (*¹一郷他[2011] fn. 161 に従い訂正. praśamavāhi BhKr I. ^{*2}一郷他[2011] fn. 62 に従い訂正. tat pratipakṣas BhKr I) (沈鬱と高揚が完全に鎮まったならば、心は平静に流れていくが、その場合には意志的努力という過失がある。その場合、それ(意志的努力)の対治である捨が修習されるべきである); AAĀ 929, 11–14; BhKr III 10, 22–11, 1; MAVṬ 173, 20–174, 2; MAVṬ 175, 4f.

¹³ Cf. TAĀ D 62a2f., P 68b6f.; BhKr I 208, 20–22: ebhir aṣṭābhiḥ prahāṇasamṣkāraiḥ samanvāgataḥ samādhiḥ paramakarmanyo bhavati. rddhayādīn guṇān niṣpādayati (= D 32b1f., P 34a5f.: spong ba'i 'du byed bryad po de dag dang ldan na ting nge 'dzin shin tu khugs pa yin te / des^{*1} rdzu 'phrul la sogs pa yon tan rnams sgrub par byed do // (*¹des om. Skt.)) (これら 8 種の断行を伴った三昧が最も勝れた堪能性となる。[それにより] [四] 神足等の諸々の功德が完成されるのである); MAVṬ 172, 7–173, 9.

¹⁴ Cf. TAĀ D 62a3, P 68b7f.; BhKr I 208, 22–24: ata evoktaṃ sūtre. prahāṇasamanvāgatam^{*1} rddhipādam bhāvayatīti (= D 32b2, P 34a6: de lta bas na mdo sde las spong ba'i 'du byed bryad dang ldan pa'i rdzu 'phrul gyi rkang pa bsgom mo zhes bka' tsal to //) (*¹一郷他[2011] fn. 164 に従い訂正する. prahāṇasamanvāgatam BhKr I) (まさにこのゆえに、経典に [以下のように] 説かれている。[八] 断 [行] を伴った [四] 神足を修習すべきである、と)。

¹⁵ Cf. TAĀ D 62a3–5, P 68b8–69a1; BhKr I 207, 13–16: yad āha. tatra ci-

ttaṃ sthāpayati. samsthāpayati. avasthāpayati. upasthāpayati. damayati. śamayati. vyupaśamayati. ekotikaroti. samādadhātīti navapadaih (= D 31b7-32a1, P 33b2f.: bka' stsal pa / de dang de la sems 'jog go // rgyun du 'jog go // blan te 'jog go // nye bar 'jog go // 'dul bar byed do // zhi bar byed do // rnam par zhi bar byed do // rtse gcig tu byed do // mnyam par 'jog go zhes tsig dgu smos so //) (次のように9つの句によって説かれる。それ(対象)に対して心を留めるべきである。[心を]しっかり留めるべきである。[心を]安定させるべきである。[心を]近づけるべきである。[心を]制御すべきである。[心を]鎮めるべきである。[心を]止息させるべきである。[心を]一点に集中すべきである。[心を]定めるべきである、と); ŚBh III (1) 44, 1-48, 5; 『習定論』 T 31, 775a24-775a27.

¹⁶ Cf. BhKr I 207, 16: tatra sthāpayati, ālambanena badhnāti*¹ (= D 32a1; P 33b3f.: de la 'jog ces bya ba ni dmigs pa la sems*¹ 'dogs pa'o // (*¹sems om. Skt.)) (*¹sems ('dogs pa'o) Tib. for badhnāti.) (それらのうち、[心を]留めるべきであるとは、[心を]対象と結びつけるのである); ŚBh III (1) 44, 6-8; 『習定論』 T 31, 775a27f.

¹⁷ Cf. TAĀ D 62a5, 69a1f.; BhKr I 207, 16f.: samsthāpayati, tatraivālabbane prabandhena pravartayati*¹ (= D 32a1, P 33b4: rgyun du 'jog ces bya ba ni dmigs pa de nyid la rgyun du 'jog pa'o //) (*¹'jog pa'o Tib. for pravartayati) ([心を]しっかり留めるべきであるとは、[第一の心住と]同じその対象に[心を]継続的に起こさせることである); ŚBh III (1) 44, 9-12; 『習定論』 T 31, 775a28f.

¹⁸ Cf. TAĀ D 62a5, P 69a2; BhKr I 207, 17f.: avasthāpayati, vikṣepam avagamyā tat pariḥarati (= D 32a1, P 33b4: blan te 'jog ces bya ba ni rnam par g-yeng ba shes nas de spong ba'o //) ([心を]安定させるべきであるとは、[心の]散乱を理解し、そ[の心の散乱]を取り除くことである); ŚBh III (1) 44, 13-15; 『習定論』 T 31, 775a29-775b2.

¹⁹ Cf. TAĀ D 62a5f., P 69a2f.; BhKr I 207, 18-20: upasthāpayati, vikṣepam pariḥṛtya upary upari punas*¹ tatraiālabbane sthāpayati (= D 32a1f., P 33b4f.: nye bar 'jog ces bya ba ni rnam par g-yeng ba spangs nas phyi phyir brtun te dmigs pa de nyid la 'jog pa'o //) (*¹punas om. Tib.) ([心を]近づけるべきであるとは、[心の]散乱を取り除いた後、さらに益々同じその対象に[心を]留めることである); ŚBh III (1) 44, 16-46,1; 『習定論』 T 31, 775b2.

²⁰ Cf. TAĀ D 62a6, P 69a3; BhKr I 207, 20: damayati, ratim utpādayati (= D 32a2, P 33b5: 'dul bar byed do zhes bya ba ni dga' ba bskyed pa'o //) ([心を]制御すべきであるとは、歓喜を生起させることである); ŚBh III (1) 46, 2-6; 『習定論』 T 31, 775b2f.

²¹ Cf. TAĀ D 62a6, P 69a3; BhKr I 207, 20f.: śamayati, aratiṃ vyupaśamayati vikṣepadoṣadarśanāt (= D 32a2, P 33b5f.: zhi bar byed do zhes bya ba

- ni rnam par g-yeng ba'i nyes pa mthong nas mi dga' bar rab tu zhi bar byed do //) ([心を] 鎮めるべきであるとは、不歓喜を止息させることである); ŚBh III (1) 46, 7–11; 『習定論』 T 31, 775b3–775b5.
- ²² Cf. TAĀ D 62a6, P 69a3; BhKr I 207, 21f.: vyupaśamayati, styāna-middhādīn vyutthitān vyupaśamayati (= D 32a3f., P 33b6: rnam par zhi bar byed pa ni rmugs pa dang gnyid la sogs pa langs pa rnams sel ba'o //) ([心を] 止息させるべきであるとは、激しく生じた鬱ぎ込みや眠気等を止息させることである); ŚBh III (1) 46, 12–14; 『習定論』 T 31, 775b5f.
- ²³ Cf. AKV 237, 7: cittābhisamṣkārajatvād iti. cittābhogajatvād ity arthaḥ.
- ²⁴ Cf. TAĀ D 62a6f., P 69a3f.; BhKr I 207, 22–208, 1: ekotīkaroti, ālambane 'nabhisamṣkāravāhitāyāṃ yatnaṃ karoti (= D 32a3, P 33b6: rtse gcig tu byed pa ni mngon par 'du byed pa med pas 'jug par 'bad par byed pa'o //) ([心を] 一点に集中すべきであるとは、[心が] 対象に対して意志的発動無しに起こるように努力を為すことである); ŚBh III (1) 46, 15–48,1; 『習定論』 T 31, 775b6–775b8. ŚBh III では、意志的発動 (abhisamṣkāra) の関与が示される。
- ²⁵ Cf. TAĀ D 62a7, P 69a4f.; BhKr I 208, 1f.: samādadhāti, samaprāptam cittam upekṣate samanvāharatīty arthaḥ (= D 32a3, P 33b7: mnyam par 'jog ces bya ba ni sems mnyam par gyur pa na btang snyoms su byed pa ste / mnyam par 'dzin zhes bya ba'i tha tshig go //^{*2} (*ces D. ^{*2}// om. P)) ([心を] 定めるべきであるとは、平静な状態に達した心は[対象に] 無関心である、[すなわち] 集中することである、という意味である); AKBh 55, 16f.; AKV 129, 21f.; ŚBh III (1) 48, 2–5; 『習定論』 T 31, 775b8f.
- ²⁶ Cf. TAĀ D 62a7–62b1, P 69a5; BhKr I 208, 2f.: eṣa caiśāṃ padānām arthaḥ pūrvācāryair maitreyaṇa^{*1} ca vyākhyātaḥ (= D 32a3f., P 33b7f.: tshig 'di rnams kyid don 'di ni 'phags pa byams pa dang / sngon gyi mkhan po rnams kyis bshad do //) (^{*1}'phags pa byams pa Tib. *for* maitreyaṇa) (これら [九種心住に関する九つの] 語句についての上記の意味は、先師たち、そして、マイトレーヤによって説示されている); ŚBh III (1) 44, 13–15; 『習定論』 T 31, 775a27; 『顕揚論』 T 31, 501b26. PYBhKrU では、九種心住説がアサンガ (slob dpon thogs med) の著書に基づき示されたとする。九種心住説の起源については諸説ある。藤田[1988]は『大空経』『雑阿含』第 560 経等に言及する。一郷他 [2011] fn. 158; 382 を参照。
- ²⁷ Cf. TAĀ D 62b1f., P 69a5–7; BhKr I 207, 5–7: yadā tu tatrālbane^{*1} 'nabhisamṣkāravāhi yāvadicchaṃ cittam pravṛttam bhavati, tadā śamatho niṣpanno veditavyaḥ (= D 31b5f., P 33a8–33b1: gang gi tshe dmigs pa de nyid la mngon par 'du byed pa med par ji srid 'dod pa'i bar du sems 'jug par 'gyur ba de'i tshe zhi gnas rdzogs pa yin par rig par bya ste /) (^{*1}de

nyid la Tib. *for tatra*⁰) (一方で、その対象に対して、意図する限りで、意志的発動無しに心が起こるとき、止が完成したと知られるべきである)。